

令和7年度第4回岡山市総合教育会議

日時：令和8年2月4日（水）

場所：市庁舎 第3会議室

午後3時31分 開会

○司会 それでは、定刻となりましたので、ただいまから令和7年度第4回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、市長、教育長及び3名の教育委員会委員のご出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

現在、傍聴の希望はありませんが、あった場合は入室を許可してよろしいでしょうか。

○市長 はい。

○司会 傍聴者の入室を許可します。

それでは、協議事項に移ります。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。

市長、よろしくお願ひいたします。

○市長 皆さん、こんにちは。

それでは、次第に沿って議事を進めたいと思いますが、協議に先立ちまして、総合教育会議には今回が初めての出席となる杉山教育委員から、一言ご挨拶をいただきたいと思ひます。

○杉山教育委員 今ご紹介にあずかりました杉山でございます。

昨年12月24日に教育委員に任命していただきました。私は弁護士として、2007年に岡山弁護士会に登録しまして、以後、岡山弁護士会で活動させていただいております。教育に関しては専門ではないのですが、中1の長女と小4の次女、小2の長男がおりまして、保護者の立場として少しでもいいことを発言等をさせていただければと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

○市長 ありがとうございます。弁護士の立場だけでなく、保護者の立場、ないしは教育というのは、もう誰もが一家言あるものでありますので、そういう面で様々な視点からご意見をいただければと思ひます。

本日の会議は、従来どおり、岡山市中学校長会の服部会長、また岡山市小学校長会の安東会長にもご出席をいただいております。幅広いご意見をいただければと思ひます。

では、具体的な協議に入りたいと思います。

協議事項、「第3期岡山市教育大綱の策定について」でございます。資料について事務局から説明をお願いいたします。

○事務局 事務局です。

それでは、資料についてご説明いたします。

まず、本日は教育大綱の骨子案をご協議いただく予定でしたが、前回の会議で骨子、骨格の部分につきましてはご協議いただいておりますので、その内容を踏まえて大綱の素案を作成しております。この素案についてご説明いたします。

全体の構成として、「はじめに」と題した前文を置き、本文として大綱の柱、施策の検証、施策の方針の3つの項目を設け、最後に「おわりに」で結ぶ形を考えております。また、期間は令和8年度から令和12年度までの5年間としております。

それでは、各項目の主な内容についてご説明いたします。

1枚めくっていただいて、前文の「はじめに」につきましては、現在作成中でございます。

右側、1ページですが、第3期教育大綱の柱についてです。

これは大綱の総論部分になります。

上段は、これまでの1期・2期大綱の流れを受け継ぎ、引き続き「樹人」を記載し、100年先を見据えた人材育成に取り組んでいくことを掲げています。

中段以降は、1期・2期大綱の総括や社会背景等を踏まえ、これからの岡山市の子どもに必要なものとして、3つの点を上げています。

まず、考える力の基礎となる学力と発信力、次に誰一人取り残されない学びの場・居場所の充実、そして地域や社会とつながり、何ができるか考え、行動する力です。

その実現のために、大綱の柱として3本の柱、学び続ける力の育成、不登校のこどもなどの居場所づくりと社会的自立への支援、及び岡山市への愛着と誇りの醸成を掲げております。

次に、2ページ、3ページの施策の検証ですが、これまでの大綱が築いてきたことを第1期・第2期教育大綱の総括として、背景と目標、取組、成果と課題を期ごとにまとめています。

まず、第1期教育大綱の背景と目標では、「学力の向上」と「問題行動等の防止及び解決」の2つの目標と、その2つの目標を掲げた背景、学力については偏差値48の教科が見

られ、また暴力行為の発生件数や不登校の出現率など、1期大綱策定時の背景を記載しております。

その目標に対する具体的な取組を中段に、また下段の成果と課題では、取組の結果、全国学力・学習状況調査において偏差値50以上、中学校での暴力行為発生件数の低下といった達成できたものを青の丸で、記述式問題の正答率や新たな不登校児童・生徒の出現率の増加といった未達成、課題として残ったものを青の三角で表しています。

3ページになりますが、これらの第1期教育大綱の成果と課題を受け、第2期の教育大綱の背景と目標では、目指す子どもの姿「自ら個性を磨き、選択と挑戦を繰り返すことができる子ども」、その実現のための育む5つの力、その5つの力の基礎としての「考える力の基礎となる学力の育成」、「新たな不登校の抑制」の目標を記載しています。

その目標に対する取組、新たに取り組んだもののみですが、それを中段に、その成果と課題は下段に、1期の記載と同様、取組の結果、自分の考えを整理して伝えることができる子どもの増加、全国学力・学習状況調査において偏差値50以上の継続といった達成できたものを青の丸で、探究的な学習をしている子どもの割合や新不登校の出現率が全国平均に比べ緩やかな増加にとどまったものの増加していることなど、課題として残ったものを青の三角で表しています。

これらの施策の検証を踏まえ、4ページからの施策の方針では、1ページに掲げた3本の柱について、それぞれ現状、目標、取組を記載した内容としています。

4ページ、まず柱の1の学び続ける力の育成についてです。

これまでの大綱で目標とした全国平均レベル以上の学力は達成できているものの、考える力の基礎となる一定レベルの学力は必要であると考え、「全国平均レベルの学力の維持」を目標として設定しています。加えて、2期大綱の課題を踏まえ、子どもがこれからの時代に必要となる学び方を習得できるよう、課題に対して情報を収集し、考えをまとめ、自らの考えを発信する「探究的な学びの充実」を新たに目標として設定しています。

次に、6ページからの柱2、不登校のこどもなどの居場所づくりと社会的自立への支援では、社会的自立に向けて、子ども一人一人の背景にある要因を多面的かつ的確に把握し、多様な学びの場・居場所につなげ、子どもの実態に合った適切な支援を切れ目なく保障するため、目標として「学びの場・居場所の提供」、「個別の支援計画のさらなる充実」、「関係部局間の連携」の3点を実施することとしています。

そのための取組として、教育委員会や学校での取組に加え、不登校の子どもなどの居場

所づくりと社会的自立への支援のために、岡山っ子育成局が教育委員会と協働し、子どもと保護者、民間支援団体の実態把握に努め、サポート体制の充実に取り組むことや、こども食堂など、子どもの居場所づくり支援を盛り込んでおります。

次に、8ページからの柱3は、岡山市への愛着と誇りの醸成についてです。

1ページの説明で触れましたが、岡山市の子どもに必要なものの一つとして、地域や社会とつながり、何ができるか考え、行動する力を上げ、その実現のための柱として設定したものです。

その人の価値観や生き方に影響を与える存在である「ふるさと」は、その人自身の原点であり、かけがえのないものです。岡山市の歴史・文化やそこに関わる人々の思いなどを知り、地域や社会のために何ができるかを考え、行動するなどの活動を充実することや、地域をテーマとした、先ほど柱1でも説明させていただきました探究的な学びを行うことなどで、ふるさとへの愛着や誇りが醸成され、さらには自己実現や社会的自立、社会参画につながっていくと期待し、現状を踏まえ、目標と取組を設定しております。その取組には、学校での学びだけでなく、地域社会での学びについても進めていくこととしております。

最後に、裏表紙になりますが、「おわりに」としまして、第3期教育大綱で掲げた施策の実現に向け、取り組むことを記載しております。

説明は以上です。

○市長 ありがとうございます。

教育長から補足を、はい。

○教育長 では、私のほうから補足をさせていただきます。

まず、4ページ、5ページをお開きください。

来年度、取り組む柱の1ですが、「学び続ける力の育成」について、第2期大綱の取組では、情報を収集し、考えをまとめて発表することが十分ではございませんでした。そこで、授業に探究的な学びの視点を取り入れ、さらに充実させていこうということになりました。

5ページの下段をご覧ください。

先ほどから何度も出ておりますが、探究的な学びとは、自ら課題を見つけ、情報を収集し、考えをまとめて発表する学びの過程、学び方のことです。子どもたちがこれらの過程を積み重ねることで、自分で考えることや課題解決に向かって粘り強く取り組むことがで

きるようになると考えています。これまでの大綱で培ってきた基礎となる学力に加えて、子どもたちが探究的な学び方を習得することで、生涯にわたって学び続ける力が育成され、自らの人生をかじ取りする力や自分らしく生きる力につながると考えております。

目標や目標値については、記載のとおりでございます。

目標値についての考え方ですが、令和6年度の数値を基準として1年で1ポイント、今後5年間で5ポイント上がる設定を考えております。

続いて、取組についてですが、これまで効果があったものは継続して取り組む。新たに取り組むこととして、学校に対して事務局の指導主事を派遣し、授業改善へ向けた指導助言を行うとともに、教育委員会が主導で子どもたちの学習の成果を発表する場を設定することを考えております。

続きまして、6、7ページをお開きください。

柱2、「不登校のこどもなどの居場所づくりと社会的自立への支援について」でございます。

不登校については、第1期大綱の策定時からの課題でした。学校を休み始めた初期の段階で個別の支援計画を作成し、組織的に支援することで新たな不登校となる子どもの割合は全国平均よりも抑えることができましたが、不登校の子どもは増加しています。現在、不登校の子どもへの支援については、学校教育だけで対応し切れないものも出てきております。また、子どもだけでなく、不登校の子どもさんのいらっしゃる保護者についても支援が必要であると考えておりました。

これまでの大綱策定に向けた協議の中で、教育委員会と関係部局間において子どもたちへの切れ目ない支援に向けた協議がなされるべきという、我々にとっては非常にありがたいご意見をいただきました。教育大綱によって岡山市全体として取り組むことができることに感謝いたしたいと思います。そして、協働しながら、できるところから前向きに始めていきたいと考えております。

目標、目標値は、掲げてあるとおりでございます。

取組についてですが、まずは岡山っ子育成局と協働して進めていきたいと考えております。早期の個別の支援計画の作成など、これまで効果があった取組は当然継続したいと思います。さらに、子ども、保護者、民間団体の実態把握をすることから始めていきたいと考えています。そのデータを得た上で、何ができるのかを一緒に協議してまいりたいと思います。よろしく願いいたします。

また、7ページの下図に、子どもや保護者に対する相談窓口などの支援機関や関係機関や施設を示している。これを関係部局で共有しながら実態に寄り添った支援を提供することを目指してまいりたいと思います。

続いて、8ページ、9ページをお開きください。

最後に、柱3、岡山市への愛着と誇りの醸成についてです。

この柱の議論の初めは、一昨年12月でしたが、市長と次期大綱についての相談をしたときであったと思います。子どもたちは将来どこにしようとも活躍できる、その人の原動力になり得るものは何かとか、粘り強く目標に向かって取り組むために自分自身の軸を揺るぎないものにするには何が必要か、人の原点である家族やふるさとを大切にすることを育むことはどうか、様々今日まで議論してまいりました。

私個人の思いと振り返りとしては、オリンピックで活躍した地元の体操選手の岡慎之助選手、あるいはアメリカで活躍している山本投手が至るところで地元への感謝を述べられていました。やはりどこで活躍しようとも地元での応援とか地元でお世話になったことというのは大事だなと私個人的にも思いましたし、やはりこの柱3のテーマは私自身も新たに始める部分もございますが、大事にしたいなというふうに思っているところであります。

岡山市の子どもの現状がそこに掲げてありますが、地域や岡山市の歴史・自然に関心がある子どもの割合が高いとは言えないのが事実であります。我々今までこうした取組が十分でなかったことは、非常に反省するところであります。

学校で地域学習についてどのように進めているかについて、校長や若手教員と、市長と私も含め、一緒に話をする中で、学校はそれぞれ学校区、中学校区なり小学校区の範囲の学習を行っているのですが、岡山市やより広い地域の学習は、学校によって取組がまちまちであることが分かりました。その中で、意見交換をする中で、ある若手の先生からは、子どもたちはよく知っている学区については多くの子どもたちが好きだと答えるが、よく知らない岡山市のことについては好きだと答える子どもが減ってしまうというお話もありました。

まず、地域を知ることが必要、そして知るからこそ、大切に思い、自分事として捉え、地域や社会のために何かできることをやってみたいと考えるようになるのでは、総合教育会議の議論の中でこのような意見もいただきました。

議論を重ね、新規の柱として据えた柱3の目標は、まずふるさと岡山の歴史・伝統文化

や自然、そしてそれに関わる人々の思いに子どもたちが触れ、知るきっかけを創出すること、そして地域について学んだことを発表する場を提供し、ふるさとの価値を実感させるとともに、地域や社会のために何ができるかなどを考える力や実際に行動する力を育成することとしたいと考えております。

目標値は、そこに掲げてあるとおりでございます。非常に現状値の中のデータが3年分、2年分という短い期間でございますので、平均値を取りながら目標値を定めたところでございます。

教育委員会の取組としましては、子どもたちが地域を知るきっかけづくりとして、市や地域の歴史に関する資料を作成・提供するとともに、地域学習に関する講師を派遣したり、学んだことを発表する場を設定し、地域学習の充実を図ろうと考えております。歴史や自然に直接触れたり、地域の人と共に活動するなどの体験活動や、柱1で説明した探究的な学びのテーマに地域を取り上げるなどの視点を重点的に進めていきたいと考えております。

子どもたちの学びは、学校教育だけに限らず、地域社会でも進めていきたいと考えております。文化財に関する講座を開いたり、中央図書館では郷土資料を学校でも活用できるデジタルアーカイブにして提供をしております。クロームブックで見ることでもあります。また、公民館においても子どもが地域活動へ参画できるような取組を進めていく。教育委員会でもチームとして様々な取組をする予定にしております。チーム岡山市として取り組んでいけることを期待しております。

私からは以上です。

○市長 ありがとうございます。

それでは、議論に移るとというのが素直なところなんですけども、杉山さんが今回初めて来られたということで、まず今、大綱って何なんだと、その前に総合教育会議って何なんだというのが案外分からないという要素もあるのではないかなと思うんです。これ、一言で言うと、教育問題、教育界の方だけに任してはいけないということなんです。いろんな事件があって、それは教育界の人たちというのは非常に真面目、一つ一つ子どもたちのことを考えていくということに対しては非常に前向きではあるんですが、やはりどうしても教育の場というところでクローズドな存在になってしまう。もう少し広い視野から議論をし、方向性を整理したらいいのではないかなということで総合教育会議というのができて、私もこのメンバーに入るということになったということで、だから最初のご挨拶で教育

のことはあまりという話がありましたけども、教育のほうを知らないほうがかえっていいというところが、これがまず一つ。

その精神で、私自身も1期目、2期目、そしてこの3期とずっと、ここへ大勢おられますけども、私だけが全て参加しています。そこの流れは門原さんにも中島さんにも一度お話ししたかもしれませんが、もう一度話をさせていただきたいなと思います。

私が市長になった当初、岡山市の学校の子たちの学力が偏差値48、この人口70万を超えるような都市で偏差値が48というのはあり得ない。何が原因なんだと。うちの子たちは、そんなに頭が悪いのかと。いや、そんなことはあるわけがないというところで、その原因を突き詰めていった。そうしてみると、今言ったように先生一人一人は真面目で優秀なんです。何でいけないかという、授業というのが、例えば大学を出て22歳、23歳でやっている、一人の先生として扱われ、授業を誰に相談するでもなく1人でやっていた。そこは教え方というのは、本来でいけば、こういう教え方がいいんじゃないかとか、そういうことがあって熟度が増えていくというのが通例なんだけど、それぞれ一人の先生として動いていた。

これを徹底的に変えていこうということで、校長先生は週何回か先生の授業を見る。教育委員会も、今日大勢来られている、みんな先生OBでもあって、その教育委員会も行って、どんな授業になっているのか。そして、話し合っってレベルを高めていったら、あっという間に偏差値は50になって、標準的な力、もう予定どおりのものになっていった。これが1期だったんですね。

2期は、我々は偏差値教育をするつもりはない。50を51にするということを考えていこうとは思わない。では、どういう子どもたち、どういう人材をつくっていくかというところで、今、例えばデジタル化がどんどん進んでいっている。例えば、弁護士さんの仕事だって、AIで判例がどんどん出てくる。仕事自身も変わっていく。こういう中で、子どもたちは、どうこれから社会の情勢についていくのか。変化についていくのか。そう簡単についていけない。そして、国際情勢もいろいろな問題が出てきて、こういう中で生き抜いていくにはどうするかということで、それはもう失敗してもいいのではないかと。失敗しても、もう一度チャレンジする、そんな子どもたちをつくっていければいいと、育成していければいいというのが2期だった。

これは、ただすごく難しいんです。いろんな指標をやりますけど、ピタッとする指標もない。だから、客観的な定量的な目標というのも4つほどつくったのですが、それもやっ

ぱり難しい。やってみると、様々な全国調査から見ると、そんなにうまくいってない、一言で言うと。では、3期目はどうするんだよというのが今の問題、意識なんです。そこも明確な解はないが、それにしてもやらないといけないことがあるだろうということで、学力の問題などはこういう整理、もう一つは不登校というのがすごく増えている。もう不登校は悪いと言ったら子どもたちに失礼なんじゃないかと、逆に言えば。不登校ありきで、学校からちょっと離れて我々が社会でそれを支えていく、そんな仕組みをつくっていったらいいのではないかとというように大きく方針を変えていく。ただ、学校教育、子どもたちに関して言うと、やっぱり教育委員会が中心とはなっていくのだけど、そういう面で少し社会で支えていく、こういうふうに変えていくべきだというのがこの考え方なんです。

これらについては、多分いろいろな議論があると思います。ぜひそのご意見をもう個人的なご意見でいいと思いますので、言っていただければと思います。3人の委員さんの議論を引き出すためにも、まず校長会の会長のほうから言っていただければと思います。

まず、安東さん、お願いします。

○安東小学校長会長 柱のどの項目からでもよいでしょうか。

○市長 何でも、はい。

○安東小学校長会長 ありがとうございます。何といても自分がまず感じたのは、やっぱり柱の3であるかなと思います。今、市長が社会で支えていくとお話をされたかと思えます。子どもにそもそも社会に目を開かせるということが柱3の根源にあるのかなと思います。柱3のような愛着と誇りを持っていったら、またそれが還流して社会に目を向ける大人になり、社会に目を向けさせる大人に育ってっていくのだらうと。結果的に都市全体が愛着と誇りを往還していく、循環していくような流れになるんだらうなと思っています。

それからもう一つは、例えば歴史資源を活用した授業とか、いろんな方と交流してとかいうことがあります、やっぱりそうだと思います。いろいろな町にある物や事、人に出会う中で、子どもたちはそこに愛着や、それから誇りというものが生まれていくのだらうと思います。

例で話すのですが、例えばうちの学校では地域の文化を大事にしている。例えば、地域で備前太鼓を伝承していたり普及している人に子どもたちが出会うとか、それから例えば西川という川がありますが、そういう川で魚を探して、都市部であっても、こんなに川をきれいにしている人がいるんだ、そういう営みがあるんだということを知ったりとか、そ

れからさらに同じ西川でも、例えばライブをしたりとかお店を開いて楽しくしてくださっている人がいる。これは恐らく庭園都市推進課さんとかとやっているような事業のことなんでしょうけど、そういった市民の方と触れ合ったり、お話を聞いたりする中で、この町っていいなとか、西川ってすてきな自然だなとか、いろいろとすてきな文化があるんだなという感じを取っているように私は思っています。

ですから、人や物や事と触れる中で、その愛着や誇りも生まれるし、それが往還していく。そのためにも、そういうふうなものに触れるということを大事にしていけたらと思います。そして、そこにはこういう部分にも他部局とか市民との協働というものが恐らくあって、今後いろんなところのお力をお借りできたら、さらにダイナミックな活動が膨らむのではないかなと感じているところです。

以上です。

○市長 安東さんのこの視点からいくと、愛着と誇りの醸成というよりは、それも一つだけ、社会の一員としての存在の自覚というか、そういうことに重点があるという感じですかね。

○安東小学校長会長 きっと帰属意識、この社会に参加しているんだという感覚や、この社会を私が関心を持つことで、参加することで、好きになることで、この社会ができていくんだということを教えることが、小学校なので、小学校としてのレディネス、準備性だと思っています。

○市長 表現をちょっと変えたほうがいいのかもかもしれませんね。今のおっしゃるとおり、そういう話はあるような気がしますね。

服部さん。

○服部中学校長会長 失礼します。今、市長のお話を伺っていて、1期から3期につながるストーリーを改めて確認させていただきました。ありがとうございます。1期目をつくった平成28年度は私自身が事務局におりまして、その議論に参加をさせていただきました。そして、平成30年に学校現場に戻りまして、小学校の校長を2年、そして今、中学校の校長を務めております。まさに教育大綱とともに、この7年間、8年間を過ごしてまいりました。

実感していることは、学校が変わったなということです。もちろん世の中も大きな変化をこの7、8年しているんですけども、その中で学校が変わらなきゃいけないという意識の変化ですね。特に、我々校長が意識を変えざるを得ないというか、変えないといけな

いなど強く思いました。それは先ほどあった偏差値48という少し衝撃的な数字もありましたけれども、そういうところから実態をどう把握をして、何をどうしていったら、これがどうなっていくんだということを本気で考えるようになったのではないかなというふうに思います。

今日、私、午前中は3コマ授業に入りました。英語の授業だけ1つ紹介させてください。

どういう授業かという、日本文化のすてきなところを外国人に紹介しよう。特に、各班でグループ活動をするのですけれども、食べ物であるとかアイテム、すばらしいアイテムについて紹介しよう。ある班はお箸、ある班はおにぎり、ある班はどら焼きなどを英語を使って外国人に2分程度で紹介をしようということで、50分の授業のうち、40分はほぼグループ学習です。最後の10分間で発表するのですけれども、本当に子どもたちが生き生きと笑顔で、どういうふうに紹介するかということを議論していました。さらには、クロームブックを使って分からない単語を調べながら、こうじゃない、ああじゃないという試行錯誤をしていました。

今まさに本当に子どもたちがそういう学び、深い学びにつながりつつあるなということを実感しています。それもこれも教育委員会と我々学校現場の者が協力、協働して、そういうことの方角性を確認しながら進めてきた成果ではないかなと思います。したがって、次の第3期の議論、これから入るわけですが、さらに未来志向型のいい指標というか、目指すものになったらいいなと考えています。

以上です。

○市長 服部さんも1期で一緒にやらせていただきましたので、より体に染みついているのかもしれませんが、この3期もやって、より校長さん、各先生方に浸透していくようにできればと思います。

それでは、教育委員の皆さん方から取りあえず一通りご意見をいただければと思いますが、一番の先輩の門原さんから。

○門原教育委員 失礼します。門原です。よろしくお願いします。

もう経緯もお聞きしまして、本当に年月がたちましたけれども、その中で市長さんも教育委員会も支えて、学校、校長会が本当にすごく動きを活発にしてくださって、組織力が高まって、そういうことが奏功して、こういうデータになっているというのは、本当に私も学生を送り出したりして、よく感じているところです。

今回、本当に3期に関しては、柱の1、2、3とありますけども、全てがリンクしているような、分かれることはないので、そういうところはとても見やすいかなと思いました。やっぱり探究的な学びは今とても大事で、自分で課題を見つけ、それに向かって、PDCAを回して次へ行こうとするというのは、まさに選択と挑戦というか、2期からも続いていて、本当に課題を見つける子どもを育てるというのはすごく大事だなと思います。こういう学びが今注目されているので、ぜひこれは学力向上のために取り組むのではなくて、それがひいては学力向上につながると捉えていけばよいのかなと思いました。

柱の2のところですけど、ここはやっぱり文科省も言っているチームとしての学校だと思うんです。多職種連携、多くの職種が連携するという、まさにこれが今度の子どもの居場所づくりにつながって行って、特に小学校は学級担任制で自分が抱え込んで何とかしないといけない、本当に真面目な先生方が多いので、そこが自分も苦しみますし、精神疾患などにもつながるケースもあるので、そうではなくて、目を配れば、いろんな人がいて、いろんな人に助けてもらえるよと。学校の中だけじゃなくって、外に行っても関係部局の人に協力していただいて、そこで子どもが生き生きしていれば、本当にそれが一番すばらしいことだと思うので、このところは意味のある取組だろうなと思っているので、関係部局の方にはぜひよろしくお願ひしたいと本当に思うところです。

それから、柱の3は愛着という言葉が非常に曖昧で分かりにくいんですけど、自分なりに言葉を考えたら、例えば支えられている自分とか支える自分とか、認められている自分とか自分が自分らしくいられる場所ではないかなと思うので、自分らしくいられるという感覚、それがあれば次の一步にも踏み出していけるので、先ほど安東校長先生がおっしゃいましたけど、地域にある物と人と事をうまく使って行って、学校裁量でしていただければ本当にいいと思うので、教育委員会がこのことに関して今まで総合はやってきていますので、意味づけしたり方向づけしたりしてやれば、先生方も負担なく取り組めるのではないかなと思って、この3つの柱に関しては私も協議に関わってきましたけど、「産みの苦しみ」で教育委員会は大変だったと思うんですけど、本当にやっとここまで来たなという気持ちがあります。

○市長 門原さんからの評価をいただいたということで、教育委員会はみんな喜んでいてと思います。

では、中島さん。

○中島教育委員 失礼いたします。中島です。

私は企業のほうからの発言として、柱3のところについて意見を述べさせていただこうかと思うのですが、ふるさとへの愛着や誇りという部分で、今私は愛着も誇りもあるんですけど、正直、小学校とか中学生がふるさとに愛着を持ってくださいって難しいと思うんですよ。それは1回、岡山から離れて岡山を振り返ったときに、こんなにふるさとって、すごかったの、いいところだったんだとか、すてきなところだったんだとか、魅力があるところだったのかということに気づいたので、そこで愛着が生まれたという自分の経緯もございますので、まず子どもには誇りというか、岡山って、企業でいうと、毎回申し上げて恐縮なんですけど、こんなすごい会社があるんだよと。

実は世界的にも有名な会社もいっぱいあるし、みんなが知らなくても日本でも有数の会社もあるし、あとは地域の産業をこれだけほかに発信している企業もあるみたいところで、岡山にある企業のすばらしいところをもっと子どもたちに知ってもらおうという部分で、岡山の経済的な部分の魅力を子どもたちに教えることで、岡山ってすごいんだという誇りを持ってもらえることにつなげていただければ、ありがたいなと思います。

そうすると、子どもたちがしっかり勉強して、もちろん大学は外に出てもいいと思うんですけど、卒業したときに、そういう企業で働こうということで岡山で就職するとか、そういう選択、岡山はこんなにすばらしいんだから、ここで働こうと思っていただけることにつながれば、企業としても今なかなか働き手の流出が増えているので、そういうところにもつながるのではないかなとは思っております。

そういう意味から、子どもたちにもっともっと岡山の企業であるとか地域の魅力であるとかを知ってもらって、誇りを持ってもらう。それを知ることの場、発表の場をつくってもらう。そういう部分をしていただければ、ありがたいかなと思うのと、今日見て、もっと岡山の本当にそういう会社の社長さんと呼んで、子どもたちにうちはこんなところがすごいんだみたいなことを知ってもらうのも、また一つ手ではないかな。先生方よりは実際に動いている人たち、企業家の人たちに子どもたちの前でご説明いただく活動も何かできたら面白いなというのを私は個人的に思いました。失礼いたします。

○市長 ありがとうございます。

では、杉山さん、お願いします。

○杉山教育委員 杉山でございます。

私この教育委員になるまで、市長がおっしゃるように、こういったもので動いていると

いうこともあまり存じ申し上げなくて、今回の柱を見ますと1と3というところがすごく相互補完的な関係になっていて、いいのではないかなと考えました。

というのも、探究的な学び、課題の設定というところで、子どもたちって、なかなか設定するのに身近なものしか設定できませんから、岡山の愛着、誇りを醸成するような教材であったり、歴史・資源・産業のものとか、こういったものをいろいろと教えていただくことによって、子どもたちが課題の設定というものもそこを参考にしてやっていけるのではないかなと思います。それを続けることによって、柱3の岡山市への愛着と誇りというのは自然に醸成されていくのかなと思いました。

私個人でいいますと、一番下の子どもが旭公民館でやっていた「ウキウキ宇喜多」という講座に参加させていただいて、そこから歴史が好きになりまして、どんどん自分で調べようになって、すごいありがたかったなという思いがありますので、本当につながっていて、よろしいかなと思いました。

あと、柱2ですけど、知り合いの保護者の方とかの中でも不登校で困られている方もいっぱいいらっしゃるって、話を聞きますと、まちまちですよ。遅刻したら行けるとか、教室には入れないけど保健室なら行けるとか、全くもう行けないとか、時期によっても今は行けるけど前までは行けなかったとか、いろいろニーズがあるので、そのニーズを広げて岡山市一体になって支えていただくという方向に、恐らくこの柱2というのは、非常に保護者としてはありがたいというか、どんどん拡充して行っていただきたいなと思いました。

以上です。

○市長 ありがとうございます。

最後に、杉山さんが触れられたのですが、柱の2の専門的な支援等を受けていない子どもの割合が全国値より高いと出ていますが、これ、例えば小学校で見ると令和2年とか令和3年は全国よりもいい状態、受けてないわけだから、いい状態が令和5年とか令和6年になると逆転して相当悪くなっている。中学校は一貫して悪いのかもしれないですけども、教育委員会のほうで、この専門的な支援等というのは一体何なのか、そして現在がこういう10ポイントも違っているという要因は一体何なのか、少し教えていただけますか。

○教育長 では、私のほうから。

○市長 はい。

○教育長 詳細な分析は十分まだできてないのですが、まずは専門的な支援等を受けてい

ない子どもというのをどう捉えるかということですが、文科省の定義では、担任以外の支援を受けていない子どもという流れになっています。逆に言うと、担任だけの支援を受けている子どもが岡山市は多いという、令和6年度だけ見ると、結果になっています。

これはもう数字というよりは、学校にいた感覚で、また校長先生方にも感想を言っていたきたいのですが、子どもや保護者が担任を頼りにしているのが強いのかなと思うのですが、裏づけになるとは言い難い数値なんですけど、文科省の調査で、先生はあなたのよいところを認めてくれると感じている子どもの割合というのがあるのですが、令和6年度岡山市の小学校が93.4%、全国の小学校が89.9%、中学校が92.6%、全国が90.4%、2～3ポイント、岡山市は高いというところなんですけど、この数字だけをもっては言い難いんですけど、やはり担任は子どもたちを何とかしようと思っていて、子どもや保護者は担任を頼っているという数字には見えるのかなと思います。ただそれだけではよくないというのは、もうみんな思っているので、これから居場所を広げていったり、関係部局も広げて支援の輪を広げるところで、担任がもう何もしなくていいんだということではなくて、担任の関わりは継続して、複数のところへ通ってもいいんだという意識づけも必要かなという話をしております。

少し聞くところによると、例えば岡山市の支援教室に1日行って、学校に1日行くとか、そういう子もいるようなので、そのあたり本当に複数の、今後フリースクールも居場所になってくるとは思うんですが、居場所を複数持ってもいいという考え方を広げていく必要があるのかなと思ったところです。補足があれば、またお願いします。

○市長 安東さん、服部さん、何かこの点に関してあれば。

○服部中学校長会長 失礼します。先ほど教育長が言われたとおりなのですが、専門的な支援等をとるところをどのように捉えるかということで、この統計はあくまで学校がそれを確認をして、統計上、国に上げたものですので、学校として、この子は学校の先生は関わっているけど、それ以外のところは不十分だったなということで数字を上げているというふうに考えられます。

実際には、もうさっきもこれは教育長が言われたとおりで、いろんなところへちょっとずつ関わりながら、その子どもの居場所づくりをしていると。それを総合的にアセスメントできる体制を今やっとなつくり始めているというようなところで、一人一人の支援計画を立てながらやっていき始めたところです。なので、これが10ポイント悪いから、ここをどうするかと、もちろんそれは考えないといけないんですけども、実際のところはもうス

ターゲットは切れているのではないかなと思います。

○安東小学校長会長 同じ感覚です。今は小学校でも担任だけで対応するという感覚ではなくて、多くの人で関わっていく。担任以外の先生とか、専門家に意見を求めていく。それから、児童生徒支援教室などの利用や、そのほか民間のNPOであったり他のスクールであったり、いろいろなものを使っていくということを、意識が変わっていている最中であるかと思います。ですから、これからも担任だけでなく、みんなで支援するという、そういう感覚をやっぱり我々も広げていく必要があるでしょうし、それができつつあると思っています。

以上です。

○市長 この不登校関係で、何か教育委員の皆さん方、ご意見ありましたらお願いできますか。

○門原教育委員 多職種連携の話ですけど、私、実は教員養成をされていて、学部を越えて、うちは小学校教諭なんですけど、養護教諭課程のところと心理士を育てるところの3職種合同で、実は合同授業を多分全国で初めてではないかと思うんですけど、3コマ取ってやったんです。その後、小学校教諭の感想を聞くと、こんなに身近に助けてもらえる人がいたんだということと、自分の自職種の役割をちゃんと知ることに加えて、多職種の役割も知って、自分ができることはもちろんするし、多職種に頼ることはすごく大事だということを実感して、役割分担をしないといけないという話から、結局そうなるコミュニケーションが大事だよねという話に、そこまで実は学生も考えていて、だからやっぱり頼る人がいるということを実感すると世界も広がるし、もっと自分も楽になるし、案外、子どもたちも目が広がるかもしれないので、多様な学びの場とか居場所というのは本当にこれからすごく大事になってくるのかなと、実感しているところです。

○市長 ありがとうございます。

教育委員会とか総務局、中原さんとか田中さん、何かコメントがあれば。

居場所を担当している田中さん。

○田中岡山っ子育成局次長 失礼します。岡山っ子育成局次長の田中と申します。

岡山っ子育成局では、子どもたちの居場所づくりとか、そういうことを頑張っております。今回この総合教育会議の打合せに、この秋ぐらいから入らせていただいているのですが、学校のほうで本当にいろんな取組をされていて、今までも先生たちはすごく頑張っていらっしゃると思えました。でも、その中でも、学校には言えないけど、きっと困ってい

ることとか、あと学校が把握していないんだけど、実はこんな居場所に行っているとか、そういう実態もあるのではないかと考えています。

今後、岡山っ子が主導となって実態の把握とかをやることで、本当の子どもと保護者のニーズというのが何なのか、どんな支援が必要なのかというのを考えていきたいと思っています。先ほど委員の先生が言われたとおり、そういうことで教員の方も一人で抱え込まなくなるということで、よりよい結果につながるのかなとも思っております。教育委員会、あと先生たちにどんな支援が今足りずに、どんなことをやってほしいのかというの意見伺いながら考えてまいりたいと思います。

以上です。

○市長 では、教員の代表である齋藤さんか佐藤さんか、どちらかコメントをいただけますか。

○齋藤教育次長 教育次長の齋藤です。

今、田中次長がおっしゃっていただいたように、学校の先生方は一生懸命頑張っていたているのは私も経験値があるんですけども、頼るのではなくて、担任の先生は自分で何とかしたいという思いを持っているというのが原則あると思います。そこに任せるのではなくて、多角的に多職種の方にもお力をいただいて、みんなで子どもたちを見ていくということは、これから大切なことだと思います。その流れの中で、先ほど服部先生が言ってくださったんですけども、アセスメントをする体制というのは、そこにつなげるためにも大切で、専門的な方にしっかり子どもを見取っていただいて、どうつなげていくのかということも大切なのかなと。そこには教育委員会もしっかり手を入れていかないといけないと今進めているところです。

○教育長 市長、いいですか。

○市長 はい、どうぞ。

○教育長 今皆さんの議論を聞いていて思ったんですけど、市長が冒頭に言われた、1期目の学力の具体的な取組で偏差値48が50になりました。そのときに言われたのが今の不登校の取組の課題に当てはまると思えました。担任1人で抱えているという、チームではなくて、学力は校長が見に行き一緒に考えて、教育委員会も行って改善したのですが、学力は学力、不登校は不登校で、でも同じ手法が使えるのではないかなと思って聞きました。

不登校もやっぱり担任1人で抱えるのではなくて、校長先生方がもう始まっていると言

われましたが、私が学校にいるときも不登校の情報交換は月1ぐらいやっていて、この子が今日来たとか、そうしたら学校で誰でも声をかけられるんですよ。この子が今どうなっているかというのをみんなでチームとして学校が把握して動くというのは、チーム学校でもあるので、そのことをこれから後ればせながらかもしれんし、もっと取り組む必要があるのかなど。さらに広がって、岡山っ子まで広がっていただければ、それはもう助かるなと思いました。

○市長 どうもありがとうございました。

今、様々な方に意見を言っていただきましたけれども、何か新たな意見がある方がいらっしやれば。

はい、どうぞ。

○服部中学校長会長 1点、最後の図のところ、子ども、保護者を取り巻く切れ目ない支援の図なんですけれども、1つお願いというか、こういうことができるのではないかなと思うことを言わせてください。

例えば、今フリースクールとかが増えていて、出席扱いを保護者が求めてくる場合があります。その場合、中学校長会の申合せとして、学校がまずはそのフリースクールなどに出向いて行って、場所とか、それから保護者負担の金額であるとか、いろんなことを聞き取りします。子どもがどういう支援を受けることができているかを確認して、それを個別の支援計画というのに学校が書いて、保護者、フリースクール、学校が3者で共有したところから出席扱いを始めるというルールにしています。

そうすると、割とかなり増えているので手間なところもありますし、もちろん見に行くことのメリットも大きくはあるんですけども、本当に様々な、ここに書いてない、例えば低所得者の世帯にいる子どもたちが学習支援を受けている事業もありますが、この子はどういう支援をどういうところで受けているのか。さっき学校には言いたくないというような話もありましたけど、学校の知らないところで支援を受けているかもしれない。そういうものをアセスメントする上では、グリップするような機関であったり、グリップする機能がもし学校外にあれば、さらによりよいアセスメントができるのではないかなと思うので、もし可能であれば、学校や教育委員会以外のところで、そういうお助けをいただければありがたいなということです。

以上です。

○市長 ありがとうございます。

服部さんから若干具体的な対応についての話がありましたが、その前にこの柱2でいくと、現状は専門的な支援等を受けていない子どもの割合が全国値より高いとか、目標値はその割合を全国値以下にするというふうになっているんですけども、今の両校長会、両校長さん、ないしは教育次長の話から見ると、担任の先生方はよくやっていると。やっているとゆえに、こうなっている。もうちょっといろいろとヘルプを求めたらいいのではないかみたいな、そんな話でありましたよね。門原さんも同じような趣旨のことを言われたのですが、これはここの柱2で書いているのは、専門的な支援を受けてないのはよくないと、これは明確に言っているところであって、今そのニュアンスは出てないよね。

だから、今日の意見を踏まえて、もちろんこのヘルプをどういう表現にするか等々はある。整理はしながら、今のままではよくないと。ただ、先生たちもよくやっているけど、教育長いわくチームという形でやっていくと。こういうような整理に変えとかなないと、この教育大綱の柱としては不十分なのかもしれないという感じがいたしました。よろしいでしょうか。だから、ちょっと表現ぶりは、後、教育委員会そして総務局のほうで整理してもらうにして、趣旨を、割と似てはいるんだけど、今これは単純に専門的な支援を受けてない子どもの割合が多いから、これを下げろと言っているんで、もうちょっと実情に入り込んだ形での表現にしたほうがいいのではないかというのが。

何が言いたかったかというのと、今までここで言っているのは、もう少し何か基本的なスタンスの変更があるんですよ。それは何かというと、今まで不登校の人間というのは学校側が何とかしろよという感じで、学校側と保護者の間で何とかしろよということはずっと言っていた。だけど、もうこの不登校って、学校だけで何とかなる問題ではない。したがって、学校とは別の組織、別の者が受け持って、この子たちの居場所を確保してあげて、その後、また高校に行くとか云々というときに、そのシステムを今度は若干変えないといけないかもしれないですけども、社会的な自立を促していく。これは案外コペルニクス的なことを言っているところもあるんですけども、その考えは皆さん方、いいということでしょうかね。

中島さん、うなずいていただきまして、ありがとうございます。それが大前提となって今の議論になっていく。両校長さん、いいですか。

今私が言った大きな転換については、もう誰も意見がなかったのでもいいと思いますけども、先ほどの文章を含めたもので変えていくということで、事務方もいいですよ。

○教育長 はい。

○市長 ありがとうございます。

私ばかり言ってもいけないのですが、次に何か論点として議論したほうがいいのか、  
るでしょうか。

はい、どうぞ。

○安東小学校長会長 失礼いたします。まだ触れられていない柱1のあたりですけども、  
先ほど杉山委員がお話しされた、地域であったりとか岡山を知ると書いてあることを課題  
にというお話をされたかと思います。2点あります。1つは、それはすごくいいことだと  
思います。子ども自身が知りたいこと、子ども自身が自分事にしたいこと、興味があるこ  
と、そういうことだからこそ、学びが進んでいく、探究のサイクルが回っていくことだと  
思いますので、柱3と柱1の関係は非常に深く、そして子どもの調べたい、学びたいとい  
う課題をぜひ扱うような今後の学校カリキュラムのほうを考えていけたらと私も思いま  
す。

○市長 1点目で、学びたいと子どもたちがこの地域のことを思っているというのは、も  
うそれは校長さんとしての肌感覚という理解でいいですか。

○安東小学校長会長 そうですね。もちろん発達段階において学びたいの意味がそれぞれ  
違うと思います。小学校1年生の言うところの地域とか自然とか文化というものと中3の  
それとは当然違いますが、子どもたちはいろいろなものに好奇心を持って、いろんな  
ことを知りたいし、見たいし、やってみたいので、そういう提供、何も提供しなかったら  
問いは生まれませんから、そういうふうなものに出会わせていくことで問いが生まれ、や  
りたいという好奇心につながっていく構造は間違いなくあろうかと思います。

○市長 はい、どうぞ。

○安東小学校長会長 では、2点目です。この目標のところ全国レベルの学力と探究と  
をセットにしてあるという点がすごく大事なかなと思ってます。探究をするといったとき  
に、どういう深さで探究ができるのかというのは、問いの深さに関係があります。問いの  
深さは何から生まれるかといったら、やっぱりその人の持っている知識だったりとか経験  
だったりとか、そういう基礎教養がベースになっています。

ですから、全国レベルの学力、つまり基礎的な知識・技能とか思考力とか表現力という  
ものが充実されることで、探究のレベルが上がる。要するに一次関数でいったら、その係  
数が大きくなるとか、最初の始まりの高さが高くから始まるというふうなことが期待でき

るので、この2つをセットにしてやっていかないといけないですよというアピールがなされていることがすごく大事なことだし、学校としても並行して行っていくことを進めてまわりたいというメッセージとして受け止めているところです。

以上です。

○市長 知識・経験が探究力を高めていくとベースになっていく。

皆さん方、何かございますでしょうか。

これ、ずっと迷っているんですが、柱1と柱3って何か間に不登校、確かに不登校の問題が大きいから前に持っていったらということでやったんだけど、どっちかという柱1の次が柱3かもしれないね。

齋藤さんは必ずしもそうじゃないかな。後で考えましょう、これね。

安東さん、もう自然と探究的なのという言葉が出るけど、これは教育界では当たり前の言葉なんですか、探究は。

○門原教育委員 はい、今はトレンドです。

○市長 トренд。

○門原教育委員 トрендです。

○市長 トレンドに逆らっちゃあいかんよね。

○門原教育委員 ですね、逆らっては。

○市長 分かりました。あまり法律用語ではないですもんね。出てきませんからね。

よろしいですか、ほかには。

柱3ですが、岡山市への愛着と誇りの醸成という、今の安東さんの議論からは少し乖離が出てしまうんですよね。だから、こういう要素も必要だとは僕は思うんですけど、身近なことで知りたいだろうと、それを知ることによってハッピーにもなるわけだし、それから新たな知識欲そして探究力、そういうものが増えていくんだという、そんな何か表現をうまくつくらないといけないかもしれませんね。

佐藤さん、何か言いたいことがあれば。

○佐藤教育企画総務課企画調整担当課長 企画総務課企画調整担当課長です。

柱の順番、それから柱3のネーミングについては、今後、協議ということにさせていただきたいなと思っております。

○市長 はい、どうぞ。

○教育長 私個人の思いですけど、柱1は探求的な学びを様々な教科等でやっていくと。

不登校の子どもたちも、私自身、どこの居場所であっても社会的自立を目指しているというところはあるので、柱1、2をやっていくことで、最後の柱3の自己実現とか社会的自立、社会参画までトータルでやっていくという、つながりはあるかなとは思うんですけど、ちょっと悩ましいところがありますね、確かに。

○市長 ありがとうございます。

はい、どうぞ。

○服部中学校長会長 私も今の教育長の意見に賛成というか、同じような考えだなと思いました。というのが、先ほど紹介した学習、今の授業がどうだったかというのを紹介しましたけれども、そういう楽しい、学びたいと思える授業をすれば、子どもたちの不登校は減ります、確実に。一人の子どもにとっても、今まで50日、60日休んでいた子が、20日、30日に減ってくると。やっぱり楽しい学び、確かな学びをすれば、柱2のところがだんだんと落ち着いてくるのではないかなと。さらに、そこを発展させるのに柱3があってもいいのかなと思いました。

以上です。

○市長 どうもありがとうございました。

はい、どうぞ。

○安東小学校長会長 服部先生とよく似た感想を持っています。やっぱり愛着と誇り、自分たちのこと、それから自分たちの歴史も含めて、自分たちのことを学ぶって、すごく子どもに関心があることです。それは恐らく不登校の子とかでも関心を持ってやっていきたいなと思うことにつながりましょうし、また社会に目を向けていく、人とつながっていくということを手助けしていくことにもつながろうかと思います。そう考えたら、柱1と柱3、柱1と柱2、柱2と柱3、それぞれが相補的につながっていて、どれがというものではない。数字が要らないのかもしれないですけど、それぞれがそれぞれを補完し合うような関係にあるのかなと、今の話を聞いて私も感じたところです。

以上です。

○市長 ありがとうございます。

でも、柱3の書きぶりが少しよくないかもしれないね。何がよくないかというのと、若干お仕着せ的吧ね。だから、いや、安東さんの発言はすごいいいと思って、要するに子どもたちが学びたがっているものなんだという、そういう整理で、我々が上から岡山いいだろうなんて言ったって、あまりよくないので、子どもたちがこういうことを学びたがって

いるという要素が出てくれば、それを我々が教えるのが十分ではなかった、ないしはそういう話題提供が十分ではなかったというところにつながっていくような気がしますけどね。

はい、どうぞ。

○安東小学校長会長 例えば、身近な魅力の実感とか、そういうことであろうかなと今伺って感じました。

○市長 ありがとうございます。

○服部中学校長会長 失礼します。ちょっと水を差すようなことを言いますが、子どもたちが触れているメディアはSNSが圧倒的に多いです。そのSNSにはローカルの話はほとんど出てきません。もちろん自分とつながりのある人だとか友達の話はありますけれども、じゃあ岡山に関する話題を子どもたちがSNSで見ているかということ、そうではありません。

圧倒的にそういう他の情報に触れている子どもたちに、じゃあ岡山市への愛着と誇りがどうやったら備わっていくのかと考えたときに、やっぱり最後のところに書いてある地域社会での学びという、その体験、最初に杉山委員がおっしゃられた、お嬢さんが公民館の活動で歴史を学んで、そこから大好きになったという、まさにそういうものを学校ではもちろんやってはいるんですけども、学校外に子どもたちが触れやすいような場や情報をちりばめていくということが本当に必要で、地方紙、まず新聞を取っていない家が増えていきます。なので、自然に目に触れる機会ってないんですよ、子どもたちにとって。そういう機会や場をどういうふうに担保していくかということは、みんなで考えていくべきかなと思いました。

○市長 ありがとうございます。

ほかにはよろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 それでは、大分時間が近づきましたので、事務局にお伺いするんですが、大綱はいつ出すようになるのですか。

○事務局 事務局です。

3月中を予定しております。今年度末までを考えております。

○市長 今年度末に出す。

○事務局 はい。

○市長 今年度末に出すときには、何かこういう会はやるのですか。

○事務局 総合教育会議につきましては、今年度最後となります。

○市長 今日が最後。

○事務局 はい、そう予定しております。

○市長 となると、今日の意見を踏まえて修正をして、また送らせてもらって、どうしてもここはまずいぞというところがあれば、指摘をしてもらおうと。そんな感じですね。

ということでございます。もう今年度は開かないそうでありますので、次回の総合教育会議は来年度になりますが、様々な教育課題について幅広く取り上げ、教育長、教育委員の皆さんと情報を共有し、活発な議論を通じて十分に意思疎通を図っていく場にしたいと考えております。

最後に、何かございますでしょうか。

よろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 じゃあ、事務局、お願いいたします。

○司会 ありがとうございました。

以上で令和7年度第4回総合教育会議を閉会します。

本日はお疲れさまでした。ありがとうございました。

午後4時45分 閉会